

巻頭インタビュー

人間への深いまなざしが 映画をつくる

Suo Masayuki

映画監督

周防正行

聞き手—ヴァン編集部



伝統的な世界への思い

ヴァン編集部(以下V)：周防監督の最新作『舞妓はレディ』(2014年)は、舞妓を目指して京都の花街に飛び込んだ少女が、厳しい稽古に加え難解な京言葉や花街の言葉に苦しみながら、周りに支えられ舞妓になっていく、という成長物語です。構想を20年間も温めてこられたそうですが、そもそものきっかけは何だったのでしょうか？

周防：『ファンシイダンス』(1989年)や『シコふんじゃった。』(1992年)で描いた世界との関係があると思います。ただ潜在的には、小津安二郎監督の影響があったのかもしれません。小津安二郎の映画は「極めて日本的」「年をとってからしか分からない」とも言われていましたが、僕は10代の頃からずっと楽しんで観ていました。歴史の中で忘れ去られることなく在り続けてきたものは「古典」という形で僕らに差し出され



○すお・まさゆき
1956年生まれ、東京出身。立教大学文学部仏文学科卒。89年『ファンシイダンス』で一般映画監督デビュー。『シコふんじゃった。』(92年)では第16回日本アカデミー賞最優秀作品賞をはじめ、数々の映画賞を受賞。93年、映画製作プロダクション、アルタミラビクチャーズの設立に参加。96年に原案・脚本・監督を務めた『Shall we ダンス?』は、第20回日本アカデミー賞13部門独占受賞という快挙を成し遂げ、2005年にはハリウッドでリメイク版も製作された。07年『それでもボクはやってない』を発表。痴漢えん罪事件を題材に刑事裁判の内実を描いてセンセーションを巻き起こし、各映画賞を総なめにする。11年には巨匠ローラン・ブフィのバレエを映画化した『ダンシング・チャップリン』を発表。12年の『終の信託』では、終末医療という題材に挑み、毎日映画コンクール日本映画大賞など映画賞を多数受賞している。

ています。しかしそれを実際に見たり、読んだり、体験してみると、その「古典」の中に、それが生まれた時代の価値観に加えて、新しい何かを発見することがあるように思うのです。『ファンシイダンス』は現代のお坊さんの修行の話ですが、700年以上前に道元が説いた禅宗にも、今どきの若者が「カッコいい」と感じられるものがありました。続く『シコふんじゃった。』では相撲の世界を描きました。僕は子どもの頃から相撲が大好きで、映画制作時は若貴ブーム。相撲も長い歴史と伝統の中で積み上げられてきたものですが、意外にもテレビ中継に合う見せ方を工夫しているなど、古いものでありながらも、新しい時代の感覚が入ってきています。そんな日本の伝統に現代の男の子が向き合う映画を2本撮ったので、それならば女の子は日本の伝統とどう向き合うのだろう?と考えたのです。たまたまニュースで「京都で舞妓さんのなり手が少なくなっている」と聞いて、お茶屋遊びという日本の文化の中で現在も修行する女の子がいるんだと知り、取材を始めました。

V：そうだったんですね。

周防：しかしお坊さんや学生相撲の世界はすぐ「おもしろい」と思えたのに、お茶屋の文化は——僕はお酒も飲めないし、とても理解しがたかった。皆さん何を楽しんでいるんだろう?舞妓さんや芸妓さんたちの働く側の気持ちはどうなのだろう?そのモチベーションは?…と。取材に行ってもいろいろ教えてくれる世界ではありませんし、お客さんの立場として「何がおもしろいのか」が実感できなければ「楽しい世界です」とは言えないわけです。

V：そうですね。

周防：20年間構想を温めたというより、そこを自分なりに理解する時間が必要だったんです。そしてもう一つ、海外の映画で発信される「日本のお茶屋文化」はちょっと違うんじゃないかとも思っていました。現代の舞妓さんや芸妓さん、お茶屋さんは、日本の社会の中でどういう存在なのかをきちんと描きたかったのです。

和の世界とミュージカルの融合

V：『舞妓はレディ』のシナリオは映画制作が決まってから執筆されたと聞きました。

周防：まったく何もなかったわけではありません。京言葉もできず、自分が育った土地の方言を思い切りしゃべる女の子が京都に出てきて、1年間かけて舞妓さんになる話。当然主人公は15〜16歳の女の子。プロデューサーはとにかくオーディションしましうと言っし…。僕もシナリオがないのにオーディションをするのは初めての経験でしたが、上白石萌音さんと出会うことができました。ミュージカル映画ですか



『舞妓はレディ』 ©2014 フジテレビジョン 東宝 関西テレビ放送 電通 京都新聞 KBS京都 アルタミラビクチャーズ

ら、魅力的な歌唱力をもつこの子ならいける!と思いました。彼女ありきでシナリオを書き進めることにしたのです。

V：物語として「舞妓さん」と「方言」がベースにあったのですね。

周防：ありました。取材の中で、京都育ちの舞妓さんがほとんどいないと聞いていたので…。彼女たちがまず覚えなければいけないのは京言葉なんです。京言葉ができなければ、まったくお座敷にあげられない。だから言葉が大事。僕、方言が大好きなんです。東京生まれだからなのか、方言に憧れがあります。

V：勘のいい人は、この映画のタイトルでミュージカルと聞けば、あることに気付くかと…。

周防：「マイコワレディ」という響きから『マイ・フェア・レディ』ですね。実はタイトルが先に決まっていて、ミュージカルにしようと思ったのは5〜6年経ってからなんです。お茶屋遊びの世界は広く深く、すぐに理解してもらうのは簡単ではないだろうと思っていました。ところが、ふと気付いたのです。お茶屋遊びはとりあえず手拍子から始まり、唄と踊りがその場の空気をつくる——それはミュージカルじゃないかと。お茶屋遊びの基本は「唄と踊り」。だったら映画も「歌と踊りでいけばいい!」と思ったんですね。

V：長谷川博己さん演じる京言葉を指導する「センセ」が、ヒギンズ教授を彷彿させます。

周防：そうですね。ただ、「育てる」という視点でみると、僕がお茶屋さんの世界を見て感じたのは、町や地域が女の子を育てているということ。ほんとうに通りがかりの芸妓さんや近所の人が、舞妓さんに声をかけている。『マイ・フェア・レディ』でイライザを育てるのはヒギンズ教授個人でしょう。そこが『舞妓はレディ』と『マイ・フェア・レディ』の違うところで。

V：長く取材をされた説得力がありますね。

周防：彼女たちは「屋形」と呼ばれる「置屋」に入り、血のつながらない女将さんを「おかあさん」と呼ぶ。屋形は女系の疑似家族で、女だけの世界。だから「一見さんお断り」も、女だけの世界に知らない男は入れたくないということなんで

す。女系の疑似家族が女の子を迎え入れながら、町全体で彼女の成長を見守る。そういう共同体の在り方は、独特だと思います。長く続いている京都の町で、女系の疑似家族が成立し続けているというのは、僕にとって新鮮なことでした。

V：富司純子さんの「千春」という役は、包み込むような母親の優しさで主人公の春子の成長をサポートしていました。

周防：舞妓さんになりたい女の子のロールモデルというか——これは花街に限らず僕らが子どもと接するときに考えたいことですが、子どもが「こんな大人になりたい」と思えるような大人でなければ、子どもはどうしたらいいのか分からないと思うんですよ。周りに魅力的な大人がいることがいちばんの教育なんだろうなと思います。だからお茶屋さんの中で春子が出会う大人たちはすてきにしておきたかった。自分が舞妓さんになったら、芸妓さんになったら、女将さんになったらあんなふうに、と思える人がいれば、がんばれるんじゃないかな、と。そんなすてきな出合いを繰り返していることって、実際の人生ではそう多くないと思いますが、僕は春子が成長していく中で、憧れる大人を出したかったのです。

共同作業の楽しさが醍醐味

V：『舞妓はレディ』から少し離れて、映画制作についてうかがいます。さまざまなアイディアはバツとひらめかれるのですか？

周防：ひらめくこともあれば、ひらめかないこともある。そして、ひらめきだけに頼らない。シナリオ段階でひらめいたら、人につけたり、自分でも考えたり、ちょっと本を読んだり参考になりそうな映画を観たり。そうやっているうちに、違うなと思って捨てることもあります。

V：現場で生まれたアイディアを取り入れることもあるのですか？

周防：それもありますし、ロケハンのときや準備のいろいろな段階でアイディアが加わり変化します。ですから監督がすべてを支配するということは僕の現場ではあり得ません。僕のアイディアでスタートして、役者さんや場所、美術監督の

作ってくれたセットの中でそれが変化して、さらにおもしろいことを思いつけばそれを取り入れる。そういう共同作業の楽しさが映画づくりの醍醐味でもあります。

V: 役者さんのポテンシャルも大事になさっているんですね。

周防: 大事にしますね。そうすることで僕の世界も広がる。とりあえずは「どう演じようと思っているのかな」と役者さんに芝居を見せてもらい、僕のイメージしていたものよりおもしろければ、そちらを採用する。そのためには、準備段階で自分がある程度考えておかないといけません。何も考えずにバツと思いつきで「いいな」と思ったことに飛びつくと、現場がめちゃくちゃになってしまいます。あらかじめそれぞれのシーンを考え抜いておけば、何がよくて、何が悪いのか、判断もしやすくなる。最初からそうだったわけではありませんが、それが今のところの僕のやり方です。

V: 監督の画面の構図や場面転換は、観客を引き込み飽きさせない力があると思います。それもシナリオを書かれる段階で見え隠れするのでしょうか。

周防: そうですね。でもそのとおりに映画ができるとは限りません。シナリオを書くときには「窓辺に女の人が立っている」というファーストシーンなら、その窓辺がどんなもので、どんな女の人のかというイメージはあります。シナリオを書きながらというより、書くときには頭の中にイメージがある、という感じなのです。

「一生懸命な人」を描く理由

V: 監督の描く主人公は、『舞妓はレディ』だけでなく、『シコふんじゃった。』も『Shall we ダンス?』(1996年)にしても、ほんとうに一生懸命ですね。普通だったらあきらめてしまったり、やめてしまったりすることでも、真摯に取り組んでがんばる姿が印象的です。

周防: がんばる人を見ているほうが気持ちがいいからでしょう。でも、現実には誰にでもできることではなくて、そもそも努力しても報われないことがある…それでも人生はいいもんだってという映画を作りたいけど(笑)。



『シコふんじゃった。』© KADOKAWA 1992

V: 映画の中では、主人公がどんどん輝きを増していくのが観客に伝わってきます。シーンによっては撮影が前後することもあると思いますが、成長の変化はどのような演出や撮影の手法によって描かれるのでしょうか？

周防: これこそ映画のマジックかもしれません。映画は、その人の人生を丸ごと描くことはできません。ある時点しか描けない。描くべきいくつかのポイントを考えますが、時間も場所も飛ぶことが多く、そんなに緻密にはつながっていない。つながっているのに逆に変化が分かりにくいので、明らかに前と違うポイントを見せると、観る人がその間を埋めてくれるんです。こういった飛躍が、登場人物の成長を観客に伝えることになる。京言葉が完璧になりましたという部分を表現するのに「よくできたね」とセンセが台詞で評価するのではなく、最初に歌ったときはセンセが首をかしげるぐらいだったものが、最後はセンセが歌っていたフレーズを完璧に、楽しそうに歌えるようになる。その様子を観ることで、観客は「この子は京言葉をマスターしたんだ」と判断してくれる。それがシナリオや演出だと思います。どこを描いて、何を描かないのか。その選択が重要です。

観客の立場になって

V: 映画監督は細部にまでこだわるができるお仕事だと思いますが、監督は個々の要素に対して、どのくらいの知識とこだわりが必要だと思いますか？

周防: 僕はある程度プロに任せてしまいます。例えば『それでもボクはやってない』(2007年)は刑事裁判にまつわる映画ですが、一生懸命勉強しても、今更僕は法律のプロにはなれません。任せられるところはプロに任せ、理解できないところは訊きます。観客も法律の専門家でなければ刑事裁判のことなど分からないはずですから、僕自身が知らないことによって、観客の立場になれるのです。アプローチで大事にしているのは、最初の戸惑いや疑問は忘れないでおこうということ。あまり詳しくなりすぎると、観客を置いていってしまうことになるからです。

V: 大勢のスタッフを統率される中で心がけていらっしゃることはありますか？

周防: 何でも言える現場にしておくということです。自分が実績を積んで偉くなればなるほど気をつけなくては行けなくて、冗談でも何でも気楽に言える現場になきゃいけない。ときどき頭にくるようなことを言われても、怒らないでいよう、笑って流そうと(笑)。いい意味での緊張感は大変ですが、遠慮したりビビったりしてはよくありません。冗談を言える現場でありたいし、その冗談1つの中からおもしろいアイデアが生まれる可能性もあるので、どん欲にみんなの意見

を聞きたいと思っています。

映画館で観るすばらしさ

V: DVDやブルーレイの時代になってきていますが、監督が感じる映画の魅力とはどこなところでしょうか？

周防: 一人の人間のイメージをいろんな技術者や出演者によって広げて、皆さんが思いもつかないような世界を展開できるところが、映画の最大の魅力であり、共同芸術の最たるものだと思います。さまざまな分野のプロフェッショナルが集まって、一人の言い出しっべのアイデアをよってたかって膨らませる。そういうことの積み重ねでできた世界が僕は大好きです。だから映画館で観るということは、そうやってつくられた世界を浴びることなんです。

V: 映画館ってやっぱりいいですね。

周防: 自分でも「これはDVDで観ればいいかな」と思うことがあります。でも、知らない人といっしょに観る空間——これってすごいですね。映画はDVDやブルーレイなどの発達で、非常に個人的なものになりつつあります。その中で、あえてこの映画は映画館で観たいと思わせるような映画をつくりたい。一つの世界の前で空気を共有するあの感じ。『シコふんじゃった。』を観に行ったとき、当時はまだ立ち見が許されている時代で、映画館の後ろのドアが閉まりきらず、いちばん後ろのおじさんは飛び跳ねながら映画を観て笑っていました。そのときは「もう、最高!」と思いましたね。

やってみなければ分からない

V: 最後に音楽科の先生方に何かメッセージはありますか？

周防: 子どもの頃、音楽の授業で大きな声で歌っていたら、先生に笑われてすごく傷ついたことがありました。音程が狂っていたのかもしれませんが、今でも覚えています。それ以来人前で歌うことがトラウマになりました。そんなふうに、特に小さい子どもはほんのちょっとしたことでブレーキがかかってしまいます。先生って、子どものそれぞれの在り方を認め、自分で考え、行動する楽しさを教えてくれる人だと思います。専門家になるならないは別として、まず音楽を楽しむ心を育てることが音楽教育だと思うので、僕がトラウマになったように、せめて音楽が嫌いになってしまうようなことはしてほしくない。友達どうしなら「音痴」と言うかもしれないけれど、先生にそう言われたらショックです。それぞれの能力の問題もあるし、そのよしあしだって、それこそ主観的な問題でしょう。「思いつ切り歌うって楽しいよね、気持ちいいよね」くらいは言ってほしかったなあ。

V: そんなご経験があっても歌と踊りの世界を描くとは、す

ごいことですね。子どもたちへのメッセージをお願いします。

周防: 最近は情報が多すぎて、自分で実感しないまま選択してしまうことが多いと思うんです。楽器でも何でも、やってみて実感して、そして好きなものを選んでほしいです。僕の映画で一貫しているテーマは「やってみなければ分からない」ということ。世の中は経験してみなければ分からないことだらけだし、僕がよく若い人に言うのは「君が考えているより、世界は広いからね」ということです。この世の中はものすごく広くて、いろいろな価値観がある。勉強はどうしても「一つの正解」を求めてしましますが、正解は他にもたくさんある。「あれもありならこれもあり」という多様な価値観を、ぜひ子どもたちにはもってほしいですね。

Information

ご紹介した映画のBlu-ray & DVDが発売されました!

	『舞妓はレディ』
	・スペシャル・エディション 発売中 (Blu-ray2枚組) 定価(本体 6,700円+消費税)
	・スタンダード・エディション 発売中 (DVD 1枚組) 定価(本体 3,800円+消費税) ※ジャケットはスペシャル・エディションと異なります。
	発売元: フジテレビジョン 販売元: 東宝

周防監督の新刊が発売されます!

『それでもボクは会議で闘う——ドキュメント刑事司法改革』

Now Printing	岩波書店 定価(本体1,700円+消費税) 4月8日(水)発売
	映画『それでもボクはやってない』で日本の刑事裁判の不条理を描いた監督が、思わぬ縁で法制審議会・特別部会の委員に。えん罪をなくすための改革を求めて闘った、葛藤の日々を自らつづる。異色のノンフィクション。

特集 1

中学生による 文楽の保存伝承活動 への取り組み



岐阜県の本^ま市^{くわ}上真桑地区に300年以上前から伝わる郷土芸能、「真桑人形浄瑠璃」。

毎年3月の春分の日とその前夜には、^{そののへ}物部神社の祭礼に奉納上演され、「真桑文楽」として親しまれてきました。

現在も地元の真桑小学校、真正中学校では「真桑文楽保存会」の指導を受けながら、児童・生徒が「真桑文楽」の保存伝承活動に取り組んでいます。

今回ヴァンでは、本^ま市^{くわ}立真正中学校を訪れ、文楽の活動を担当されている所 暁陽先生(社会科教諭)と実際に取り組んでいるお二人の生徒にお話をうかがいました。



道下 聡先生
本^ま市^{くわ}立真正中学校校長

文楽 17世紀末に大坂(現在の大阪)で生まれた人形劇。大坂の町人文化を背景にして発展した。太夫と三味線によって演奏される義太夫節に人形遣いがびたりと呼吸を合わせ、人間どろしが織りなすさまざまな物語を表現する。

真桑文楽が生まれた背景：

この地域は根尾川水域にあり、昔からしばしば水害に悩まされたうえに、また灌漑用水の利用についても、激しい水争いが起きていた。この争論解決に尽力した福田源七郎(元禄5／1692年没)の功に報いるため、元禄年間に「義民源七郎」という外題の人形芝居を上演したのが、真桑の人形芝居の起こりと言われている。台本や人形の実態は明らかではないが、明治初年に至るまで用水の恩恵に浴した2郡16か村が毎年村の石高に応じて経費を負担し上演を続けてきたという。



地域に受け継がれる文楽を継承する

ヴァン編集部(以下V)：資料を拝見すると平成元年頃、真正中学校では文楽の活動が現在の「真桑文楽同好会」ではなく、文化部として位置付けられていたのですね。

所：そうです。部活動としていた時期もありました。しかし、部活動だと兼部できず、例えば地区の対抗試合に参加したいというサッカー部に文化部が対抗していくのは困難になってきました。そこで、サークルのような同好会というかたちにして、部活動も兼ねられるようにしたと聞いています。今もほぼ3分の2ぐらいの生徒が、文楽同好会以外に部活動をしています。

V：学校で文楽に取り組む以前は、どのようにこの地域で伝承されてきたのですか？

所：地域の子ども会などで、小中学生を対象に活動していたようです。おそらく、子どもの減少をはじめ地域のさまざまな事情があり、学校での取り組みに推移してきたのではないかと思います。

V：先生は真正中学校での文楽の活動に何年ぐらい関わっていらっしゃるのですか？ご自身が希望されたのでしょうか？

所：この学校へ異動してきた翌年、4年前からです。希望はしていませんでしたが(笑)、任せても



○ 所 暁陽(ところ・あきひろ)
本^ま市^{くわ}立真正中学校教諭

らって楽しいなと感じています。文楽のほか、昨年度はサッカー部、今年度は陸上部を兼任しています。

V：真正中学校で担当される前は、真桑文楽についての印象はどうでしたか？

所：人形と太夫による語り(浄瑠璃)と三味線が一体となった動き、三者が一体になることに対してほんとうにすごいというか、ある種の感動がありました。中学生が演じるのを初めて観たときは、すごい、あっぱれだなと思いました。担当になったときは、感動できる舞台がつくれるのか、自分ができるのかと不安になりました。

練習と人形の管理

V:練習はどのように行われているのですか？

所:三味線と浄瑠璃は地域にお住まいの先生から指導していただいています。それぞれを受け持つ生徒は、年間を通して毎週1回、20時に始めて1時間から1時間30分程度の練習を行います。2人一組になって担当パートを語ったり、三味線を演奏したりします。

V:人形遣いはどのように練習するのですか？

所:8月に行われる「サマーフェスタ」、3月の「物部神社祭礼」のそれぞれ2、3か月前から10～15回の練習を行います。真桑文楽婦人部の方々が中心となって指導してくださっています。

V:三味線や浄瑠璃、人形遣いは、どのように振り分けるのでしょうか？希望制ですか？

所:希望制です。三味線や浄瑠璃は、中学校から始めるとなるとどうしても遅いので、小学校で経験のある生徒が受け持つケースがほとんどです。人形遣いについても、主となる人形はここでは2体なので、ある程度経験のある生徒が引き継いでやってくれます。それ以外の手と足については、初めてという生徒も何人かいます。

V:人形は、学校が所有しているのですか？

所:道具は、鍵のかかる保存会の保存庫に全部収納させていただいています。特に頭はとても大事ですので、練習後は保存会の方に必ず預かっていただきます。学校の全校朝会などで使用する場合でも、頭だけは当日取りに行って、終わったらすぐ返却するようにしています。損傷したり紛失したりしてはほんとに困る大切なものです。

V:文楽劇場の人形のように、目や眉毛が動くの



ですか？

所:中学校で使っているものは、目は動きません。…余談ですが、正式には黒子をかぶって演じるところを顔を出してやっているのも私たちの活動の特徴です。

V:人形遣いの練習では、毎回必ず実際の人形を使うのでしょうか？

所:そうです。もうすぐ練習が始まる時期ですが、会場である神社に生徒たちが行って指導を受けます。

地域の方との交流を大切に

V:地域の伝統的な芸能活動について、中学生にはどのように紹介しているのですか？この活動について伝え方をどう工夫されていますか？

所:いつも生徒たちに話すのは、昔は女人禁制で、女の人は舞台上上がることができなかったということです。現在、真桑文楽婦人部の方々に教えていただいているが、あの人たちが初めて舞台上に立つて演じられるようになったこと、まさしくその先駆けだったことなど、とても重い歴史について話します。上演で使用する野外の舞台には、「関係者以外立ち入り禁止」の張り紙を見ることがありますので、いろいろな人たちの努力があって舞台上に立てることを必ず伝えていきます。

V:三味線、浄瑠璃、人形遣いも、地域のボランティアの指導者の方が中心となって生徒たちを指導されているとのことですが、どのようになさっているのでしょうか？

所:僕が担当になった頃は、まだよく分からなかったのですが、これまでと同じ回数の練習を組んで

いたところ、しばらくするとだらけてしまって、生徒たちは寝転がりたり、しゃべったり、勉強したりという状況になってしまっていて…。これではよくないと思い、婦人部の方と話をし、小学生とは違うので短期集中にして回数を減らしてほしいとお願いしました。生徒たちには僕から言い聞かせるので、立派な舞台をつくっていきましょう。それでも、結局はあまりうまくいきませんでした。前日まで地域の方が心配して、「私が代わりにやろうか？」と言ってくださるような有様だったのです。やはり集中して練習するということが大事だなと感じました。生徒たちにDVDやCDを渡して音楽をしっかりと聴かせるなど、三味線と太夫の生徒には家での練習も取り入れ始めました。その関係で三味線は個人持ちにしています。週1回の限られた時間だけではなかなか難しいと思います。少しずつでも日頃から触ってみることが大切なようです。ただし、人形のほうは3人一組で演じるものなので、どうしても個人練習というわけにはいきません。個人個人のイメージトレーニングだけになってしまっているのが現実です。

V:所先生が指導者の方との関係において心がけていらっしゃることはありますか？

所:真桑文楽の活動は「人と人とのつながり」をととても大切にしています。僕もこの活動を担当しなければ、地域の方々とのつながりもなかったし、文楽の舞台上上がることもできず、指導してくださる先生にも会うこともなかったと思います。毎回というわけにはいきませんが、僕も夜練習会場へ足を運んで生徒たちに声をかけるように心がけています。地域の指導者の方には、生徒たちには厳しく教えてくださいとお願いしています。どうしても中学生にとっては、練習の合間のおしゃべりとか、地域の指導者の方たちと楽しく交流する時間のほうが楽しいわけですが、やるからには生徒たちに気持ちよく舞台上がってほしいし、一生懸命練習したからこそいい舞台ができるんだ、ということを実感してほしいのです。指導者の方も練習だから叱ってくださるし、ここを直してほしいと言ってくださいます。それはうまくなくてほしいということの裏返しだから、真剣にこたえようねと生徒たちにはいつも言っています。



三位一体から学ぶこと

V:小学生のときは小学生だけで一つの舞台を上演するのでしょうか？小中一緒に合同で取り組むことはありませんか？

所:小中学生が一緒にはないですね。小学生、中学生それぞれ別に活動しています。また、真桑文楽保存会でも年齢や性別ごとに青年部、婦人部、愛好会、同窓会などに分かれて活動してみえます。

V:上演の題目にも違いがあるのですか？

所:小中学生の題目は同じです。『傾城阿波の鳴門』の場合、小学生は前半部分だけです。15～20分ぐらいで、中学生になると40分ぐらいです。小学校で経験したことのある生徒も、後半部分を全部覚えなければいけないので、そこがやりがいのあるところだと思います。

V:生徒たちが人形遣いをしたり、三味線を弾いたり、浄瑠璃を歌ったりといった表現活動をし





すが、印象的なことはありますか？

所：人形遣いを初めて経験する生徒は、動きを合わせるだけで精一杯のようですが、だんだんと少しずつでも上達していく姿を見ることができるのはすばらしいことです。また、経験のある生徒…例えば、最初の口上を担当する3年生がいるのですが、父親も口上をする方なんです。小さいときから聴いているせいか、その生徒はとても上手です。やはり影響があると感じます。それから太夫の生徒は、急に大きな声を出すところや高い音を出すところが難しいと言うなど、きちんと特徴をつかんでいるんだなと感心することがあります。

V：文楽というのは、三味線や太夫といった音楽的な要素だけでなく、人形という美術的な要素、それから、物語といった文学的な要素から成り立っています。所先生は、文楽をどのようにお感じになっていらっしゃるのでしょうか？

所：僕は、観る人によって感じ方はさまざまだと思っています。文楽の「文」という字が伝えるように、物語を自分の中で想像し、いろいろな芸術性を感じながら観たり、浄瑠璃の味わいを楽しんだりする人もいます。浄瑠璃や三味線に合わせて人形が動いているのがすごいと言う人もいれば、物語に魅せられて、ここがいい、そこが悲しいといった感情で観る人もいます。

V：まさに三位一体が織りなす世界ですね。

所：そうなんです。3つの要素に加えて、1体の人形を3人で動かします。文楽は3つの世界から成り立っていますが、僕は生徒たちの活動を支えながら、文楽には「心を合わせる」といった意味合いがあるのではないかと感じるがあります。

V：それはどういうことですか？

所：生徒たちと本番に臨むとき「今日はいい舞台

にしよう」と言葉に出さなくても、それぞれの役割を感じたり、察し合ったりして取り組めるというか…。物語と音楽と人形の3つがそれぞれを心に響かせ、それを感じ合っているというか…。

V：そこに感動があるのですね。

所：そういうことだと思います。うまく言えずみません。

V：今、教科としての音楽でも「我が国の伝統音楽」を大切にといった目標があります。保存活動を通してお感じになることはありますか？

所：300年以上前から奉納上演されてきた「真桑人形浄瑠璃」ですが、存続の過程では厳しい状況に直面したこともあったそうです。年配者と若者との考えの相違はコミュニケーション不足が一因とも聞いています。現在の保存会の活動はそうした反省を踏まえて続けられているそうです。「伝統的な芸能を残す」ことも大事なことでありますが、世代間の交流、人と人とのつながりもとても大切なことだとこの活動を通して感じています。今はインターネットがあったり、アウトドアの世界があったりして、娯楽が増え、人の価値観も多様化しています。でも私たちの地区では真桑文楽が上演される春分の日を「これでほんとうに春がきた」と昔から楽しみにしてきました。そうした位置付けでもあるこの世界は、やはり大切に継承していきたいですね。

真桑文楽に取り組む佐藤美優さんと福田結希さん(3年生)にお話をうかがいました！

V：担当を教えてください。

佐藤さん：頭という、人形遣いです。

福田さん：私は三味線を弾いています。

V：三味線は中学生になってから始めたのですか？また、希望したのはどのような理由からですか？

福田さん：小学生のときに始めました。先輩が弾いているのを見て、カッコいいなと思ったのが理由です。弾き始めた頃は指が痛くて大変でした(笑)。

V：三味線の魅力はどんなところですか？

福田さん：響き音が魅力的です。古くからある楽器だし、奥が深いと思います。それから弾いている姿もカッコいいです。

V：頭担当の佐藤さんはいかがですか？

佐藤さん：私も小学生のときから参加しています。先輩を見てやりたいと思いました。小学校6年生になると、ミュージカルと文楽のどちらかに参加するのですが、私はそこで文楽を選びました。それで中学校に入っても同好会で続けようと思いました。

V：頭の役割で「いいな」と思うところはどこですか？

佐藤さん：頭は人形自体が重く、腕が痛くなっても大変ですが、やりがいがあります。

V：人形遣いの3人で「やろよう」と集まって練習するのですか？

佐藤さん：仲のいい子たちで取り組むので楽しく練習しています。1人と3人では全然違うと思いました。息を合わせたり、こうしたほうがいいとお互いにアドバイスし合ったりして深めていくことができます。

* *

V：下級生に教えることもありますか？

福田さん：ばちの持ち方や音をみます。



○ 佐藤美優さん



○ 福田結希さん

V：太棒だとばかりも重くありませんか？

福田さん：重いですが、慣れたらあまり感じなくなりました。

V：語りや人形、音楽をみんなで分担していますが、他の人がやっていることは気になりますか？

佐藤さん：上演中にまわりを見ていたりします。自分では前から見えないので、練習中も鏡に映る姿を見ています。

V：まわりから影響を受けますか？

佐藤さん：受けます。三味線や浄瑠璃の子たちががんばっていたら、ちゃんとやらないといけないと思うし…。

福田さん：先生の音と自分の音がだいぶ違うので、先生の音に近付けるようにがんばっています。

* *

V：文楽に実際取り組んでみて、どんな感じがしましたか？

福田さん：古い感じはしますが、昔の人たちが積み重ねてきたものなので、私たちも引き継いでいかなければならないなという思いがあります。

V：昔は女の人が参加できなかったと聞いて、どのように感じましたか？

福田さん：もったいなかったと思います。

佐藤さん：私もです(笑)。

V：下級生や小学生にも続けてほしいと思いますか？

佐藤さん：私たちを超えるような演技をしてほしいという思いと、できる限り続けてほしいという思いがあります。

取材を終えて

地域で長い歴史をもつ、希少価値の高い伝統芸能を継承しているといった気負いがなく、先生方や生徒たちが自然体で取り組まれている姿が印象的でした。特に「三位一体」の文楽を「人と人とのつながりの象徴」ととらえているところに、伝統の奥深さを実体として受け止めている現地ならではの説得力を感じました。ヴァンでは前号で和楽器をテーマにした記事を掲載しましたが、やはり生徒たちの「興味・関心」には輝きがあると実感できたことも加えて記しておきたいと思います。

風の音

エッセイ
前田美子

Maeda Yoshiko

教材とお豆腐

「寒いですね。冷たいでしょ」

「まあ慣れだよ。山古志が田舎だね。あそこよりは楽だよ。…うん、災害のときは大変だったから。今はみんな年取ってさ。私もなかなか田舎に行けないね。—ほらこれ豆腐の端っこ。麻婆豆腐にするといいよ」

「でも春が来ていてね。さつき公園を通ったら河津桜の蕾がちよっとほぐれていて。可愛い。今がいちばん好き」

「そうだね。私たちは豆腐ばかり見ているからね。“今日のは美味しいよ”とかさ、いつも同じなのね。後で買い物に出たとき、私も桜さんでも見ようかね」
「一年に一回しか咲けないから見てあげて。ハイ、これ家で摘んだ露の臺の佃煮」

朝の散歩によく寄る豆腐屋さん。仲のいい老夫婦とのちょっとした会話が一日を和ませてくれる。

音楽で考えると、教材と豆腐って似ているかもしれない。

どこをどう扱おうかと曲と向き合うことは、さまざまな料理となって美味しく味える豆腐と重なってくる。

つい先日、子ども達と小学校4年生の教材『パレード ホッホー』(高木あきこ 作詞/平吉敏州 作曲)を歌っていた。3、4年生といえはいちばんやんちゃ。歌うことが大好きで、感受性も豊か。この学年を対象とした『パレード ホッホー』、何を見付け、どう発展させられるのだろうか。さあどうしよう!!

◆全曲を歌ってみる。

「3回で覚えます。見ないで歌えるようになろう」

この一言で、「何となく歌っていた」から集中へとスイッチが入る。

「さあ、覚えたかな」

—先生、テストするの?それならもう1回やって。

—もう2回がいいよ。

子どもはほんとに「テスト」が好きだ。

「じゃああと2回でテストしよう」

—1人ずつで?!

…ワイワイ、がやがや…

◆3、4回ぐらいでの暗譜を習慣にする。

音が少々外れても気にしないで、まず歌詞を覚えることから。

「さあ全員起立。歌詞を間違えたら座

ります」

この方法だと誰も傷付かず、逆にがんばりたい気持ちが自然に出てきて楽しい。

2人で向き合って歌ったり、4人ぐらいで歌ったりするなど、友達どうしで互いを確認し合うのもよい。早く覚えられるように子どもたちにもやり方を工夫させると楽しい。

◆覚えられたね。さあ次に進もう。

「今度は、歌詞の中にアカサタナのような“ア”の響きが出てきたところで手を上げよう。例えば“パラタタ バトンが”で、できるかな?」(AAAAA AトN A)

「できたね。次は2人で向き合って“せっせっせーの”のように“ア”の響きのところで手を合わせよう。3人でやっ

てもいいよ」

1曲終わったら相手を替えていくと、「何となくやる」から「やってみると楽しい」と前向きになる。このやり方は、
①楽しい笑顔 ②友達と仲よく関わる
③自然と“ア”の響きのところで口が開く、がポイント。他にも頬がゆるんで開いてくるよさもある。友達を替えていくときは、流れにのってスムーズに(短い「メリーさんの羊」のような曲で移動すると大騒ぎにならない)。

◆声を出しにくいところは…

「ちょっと声を出しにくいところは“ホッホー”のところかな。ここは跳び箱を跳び越える勢いで。踏み板のところが“ホッ”で箱の上が“ホー”と思って、踏み板の声をしっかり!それっ!!というこ」
“ア”の響きの顎の力を抜いて明るさと、“ホッホー”のジャンプの音を身体に覚えさせる。

◆この曲のどこが好き?

「よし。いい声になってきたね。この曲は好き?嫌い?好きならどんなところ?」

—心がはずんでくるみたい。

—パレードを見に来る人が、ワクワクしてるよ。

「どうして分かったの?」

—太鼓のパララッタの音がいい感じ。
—スタックカートだからかな!

—「ア」のほうには白い音符がないよ。
—“ホッホー”って声をパーンと出す

とゆかいになる。だからさつき練習したの?

—“ア”の響きがいっぱいで明るいんだ。

どんどん出てくる。今日だけで20回ぐらい歌ったかな。言葉で表現するのが苦手な子は身振り手振りを入れて発表をしてくれる(こんなときはゆっくり待って最後まで聞いてあげたい。待つことは、とっても大切なのですから)。

「今は「ア」のことを言っているのかな。

「ア」のほうはどうか」

—つながって歌うよ。

—フワッと歌う。

—伸ばす音符があるから伸ばすんだ。これ付点二分音符だ。

—歌詞が「ア」と全然違うよ。

「遠くからパレードが近付いて来て、また遠くに行く。空気の中に音が吸い込まれて空に飛んでいく。どこに行くのかな」

◆みんなが言ったことを色紙を使って歌にしよう。

「今日はこの曲を歌っていて楽しい、こう歌いたい、この言葉が好き!!っていろいろあったけど、一人一人の顔が違うように心の中も違うのさ。感じ方はもっと違うよ。みんなおんなじ、いっしょって変でしょ。今からそれを型と色にして見せてくれる?」

◆画用紙、色紙、のりとハサミを用意して…

「だから、自分の好きな色、形を切って自分だけの『パレード ホッホー』の世界をつくってほしいの。上手とか下手とか、恥ずかしいとか関係ないので、好きなようにつくってください。挿絵じゃないよ、気持ちの心の絵だよ」

「さっきの歌が自分の頭の中で鳴っているでしょう。目を閉じると、見えてくるよ」



子どもは心で、身体で、音楽を浴びている。自分の世界を言葉以上に好きな形、色を見付けて表現してくれる。

おいしい豆腐、朝から四季の会話と出会って、豆腐料理のレシピが増える。素材を楽しむのは、人との小さな出会いかな。子ども達とすてきな曲に出会って、創造力豊かな子どもの世界を、もっともっと知りたい。広げたいな。

明日は豆乳とおからを買おうと…。

まえだ・よしこ

長崎県出身。東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、授業や課外活動を通じ、一貫して子どもと真っ直ぐに向き合い、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。元東京女子体育大学/短期大学講師。むさしのジュニア合唱団「風」指揮者。全日本合唱教育研究会理事。

著書に『子どもと歩く』『レパトリーを広げる小学生的合唱(CD付楽譜集)』(音楽之友社)、『卒業式のうた1』『卒業式のうた2』『卒業式のうた3』(共編:教育芸術社)などがある。

学校音楽とアウトリーチ

第5回 ～アウトリーチを振り返り、評価する～

佐野 靖 (東京藝術大学教授)

辻本啓子先生(杉並区立第六小学校)は、音楽アウトリーチの授業を始めた頃からの協力者です。前任の杉並区立桃井第四小学校時代から、まだアウトリーチが学校にそれほど馴染みがなかったにもかかわらず、好意的に受け入れてくださり、至らない点をていねいにご指導いただきました。アウトリーチとかかわられた数年間を振り返り、活動を評価していただくとともに、先生ご自身が気付かれた点や発見されたことをお話しいたします。

【対談：辻本啓子先生×佐野 靖】

佐野：当初は、学校や子どもの様子を明確にイメージできず、仲のよい友達で演奏しに行くぐらいの学生もいたりして、ご面倒をおかけしました。
辻本：そんなことはありません。ただ小学校現場についてはあまり知らなかったようなので、選曲や話の内容、子どもとのかかわりなどについてコメントさせていただきましたが、それも最初だけです。今は何もこちらから要求することはありません。目的意識を明確にもち、事前に具体的にイメージしてプランを練り上げているのがよくわかります。

佐野：私自身がそれほど具体的なイメージをもって指導していなかったものから。学生たちの責任ではありません。
辻本：最初はむしろ受け入れる学校側を納得させることのほうが大変でした。アウトリーチの前例がそれほどないし、鑑賞教室とどう違うのかも明確ではなかったのです。
佐野：それも私が資料をしっかりと準備し、説明すべきでした。ただ、アウトリーチそのものの概念が広いですし、今でも決まった形式やパターンにこだわる必要はないと思っています。子どもが少しでも生の音楽の魅力や演奏家の生き様といったものに直にふれて感動できるよう、学生や先生方と一緒にそうした場を新たにつくっていくことがこの活動の醍醐味だと思います。

●「曲を聴いてほしい」から「一緒に音楽を楽しむ」へ

辻本：桃井第四小学校で始めた頃は、学生さんにどうしても「この曲を聴いてほしい」という意識が強かったように思います。演奏は本当に素晴らしかったのですが、少し曲が長過ぎたり、プログラムが盛りだくさん過ぎたりしましたね。最近は、子どもが乗りやすい短い曲を中心に、十八番のクラシックを1、2曲だけ入れるなど、聴かせ方もポイントを押さえられるようになっていすし、子どもとの波長も合ってきていると感じています。

佐野：子どもと一緒に音楽を楽しむためにどうすればいいのか、という意識



がようやく徹底されてきたのかもしれませんが、もちろん個人差は大きいですし、楽器の専攻によっても温度差があるかもしれません。

辻本：そういう意味では、打楽器の学生による体験コーナーは、子どもにとって大変刺激的でした。自分たちが日頃使っている打楽器が、あんなに豊かな音色をもっているなんて驚きですね。また、参加型のワークショップは、音楽科の授業では見られない子どもの様子や可能性に出会えるところが面白いです。この子がこんないい音を出したり、こんなに嬉々として楽器に取り組んだりなど、本当に新鮮な発見があります。
佐野：表現を体験することによって鑑賞そのものも深まっていますね。アウトリーチにおける楽器体験は、よい鑑賞者への道を開くという点でも価値があると思います。

● 楽しみ方、感じ方はいろいろあってよい！

佐野：授業では音楽は耳からなど、聴覚的なコミュニケーションに傾斜しがちですが、アウトリーチでは「総合的に」音楽を楽しむことができますね。
辻本：そのとおりです。子どもは演奏家の衣装などを視覚的に楽しんでいます。弦楽カルテットのときなど、ドレス姿の演奏者に対し、女の子たちはため息まじりにあこがれをもって見ていました。お面を付けて演奏してくれた邦楽囃子では、登場の仕方も含めて演出の面白さを存分に味わうことができました。目の前の演奏家がどのように演奏したり指導したりしているかを、子どもは本当によく見えています。
佐野：男の子と女の子では感じ方が違いますか？

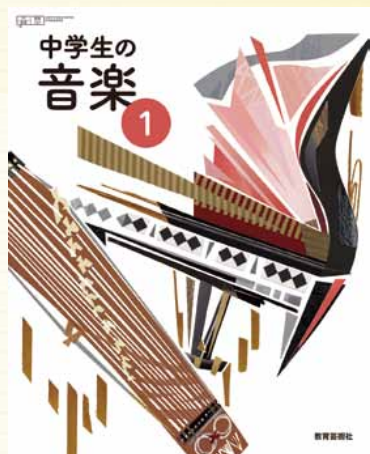
辻本：もちろん一概には言えませんが、総じて、女の子は美しいものに感動す

る傾向が強いかもしれません。男の子の場合は、これは私も意外だったのですが、どのようにこの楽器が鳴っているのかなど、メカニク的な面に興味をもつ子が少なくありません。科学的な興味・関心と言えるかもしれません。
佐野：その違いは面白いですね。もちろん、個人差はいろいろでしょうが。
辻本：どのように楽しみ、何を感じてもよいと思いますが、できれば、それを素直に言葉とか体全体で表現してほしいと思っていますし、そういう感性豊かな子どもを育てたいと思っています。

(対談収録：2月12日、阿佐ヶ谷にて)



新しい中学校の教科書



音楽科、それは学校全体を支えるエネルギー

平成28年度に『中学生の音楽』『中学生の器楽』が改訂されます。

教育芸術社では、「学習内容と手順が明確に分かる」という考え方を大切にしながら、社会全体から学校教育に期待される課題を教科書に反映させました。

今、音楽科にできること。

それは学校全体を支えるエネルギーとなって、生徒を変え、学校を輝かせていくことではないでしょうか。

今回のヴァンでは「改訂の3つの柱」を中心に、ユニバーサルデザインの理念に基づいて編集された新しい教科書の「ここが変わった」という点をご紹介します。

❖ 改訂の3つの柱

1. 確実に学べます
2. 「共に生きる力」を育てます
3. グローバルな時代に対応していく力を育てます

❖ ユニバーサルデザインの理念に基づいた教科書づくり 教科書を通じて願うこと



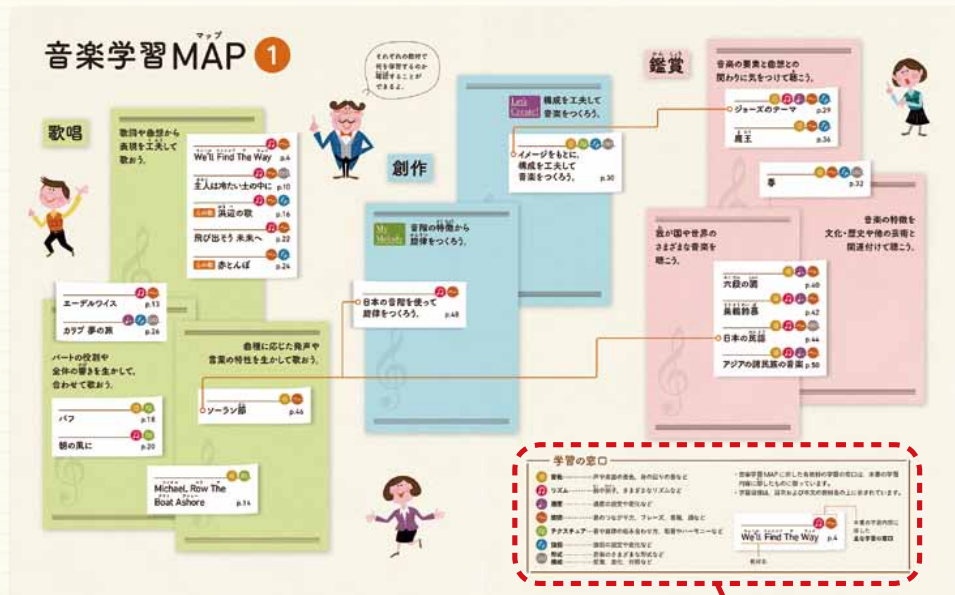
※ここでは文中の煩雑さを避けるため、便宜上「中学生の音楽2・3上」は2年、「中学生の音楽2・3下」は3年と表記しています。

改訂の3つの柱

1. 確実に学べます

音楽学習MAP

学習指導要領に示されている音楽科の学習内容と各教材との関係や、歌唱、創作、鑑賞の各分野を横断した関連などを図で示した資料です。この音楽学習MAPの活用によって、学習指導要領の「内容」に準拠したバランスのよい学習活動が推進され、音楽の基礎的な理解力や技能を確実に身につけることができます。



▲ 1年 p.2・3

○ 学習の窓口

学習指導要領に示された（共通事項）をアイコンで表し、各教材との関連を学習目標などに準じて例示しています。



義務教育9年間を一貫した音楽学習

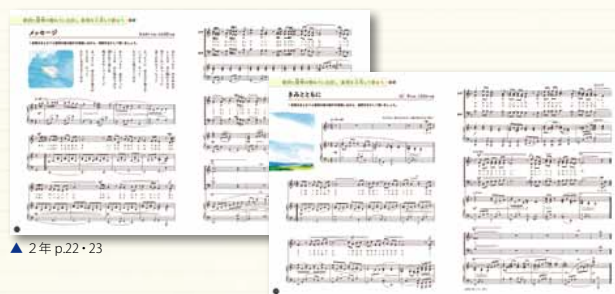
新しい『中学生の音楽』では、小学校で学習する内容を系統的に発展させて学習することができるよう配慮し、小学校とのスムーズな関係を図りました。

ここがポイント

題材構成に基づいている小学校教科書と同じように、学習指導要領の「指導事項」を題材として扱うことで（音楽学習MAP参照）、音楽学習に一貫性をもたせることができます。

歌唱

音楽学習の出発点である歌唱教材をさらに充実させ、確かな学びを支えます。



ここがポイント

「歌詞や曲想から表現を工夫して歌える教材をつくってほしい」という声を反映させ、学習内容により適した新曲を掲載しました。

器楽

『中学生の器楽』では、「アンサンブル セミナー」の内容をさらに充実させました。『中学生の音楽』の本文と同様に、各教材の学習目標を明確に示し、それに迫るための具体的な学習活動を手順に沿って示しました。



ここがポイント

「吹き出し」は思考・判断・表現のヒントとなる重要な役割を担っています。

改訂の3つの柱

2.「共に生きる力」を育てます

創作

生徒一人一人の創造性を培うとともに、グループ活動などによって主体的に協力し合いながら学習を進められる「創作」の内容を充実させました。

O My Melody / Let's Create!

1年 p.48・49

3年 p.28・29

ここがポイント★
すべて見開きページで、手順を分かりやすく示しました。創作の活動を、少ない時間で確実に扱うことができます。

「創作」の系統

	中学校1年	中学校2年	中学校3年
リズム	イメージをもとに、構成を工夫して音楽をつくらう。(p.30)	構成を工夫して、言葉によるリズムアンサンブルをつくらう。(p.30)	構成を生かしてリズムアンサンブルをつくらう。(p.28)
音色	3つのシーンのイメージをもとに、さまざまな音色を生かしながら構成感のある音楽をつくる。 (共通事項) 音色、テクスチャ、強弱、構成 指導要項 イ	3つのリズム素材を使ってリズムフレーズをつくり、それらを重ねてリズムアンサンブルをつくる。「サラダをつくって食べる」というイメージに合わせて全体を構成する。 (共通事項) リズム、テクスチャ、強弱、構成 指導要項 イ	リズム素材を使って2小節のリズムフレーズをつくり、それらを重ねてA-B-Aの構成のリズムアンサンブルをつくる。 AとBが対比的になるように、音色、リズム、強弱、速度、重なりを工夫する。 (共通事項) 音色、リズム、速度、テクスチャ、強弱、構成 指導要項 イ
旋律	日本の音階を使って旋律をつくらう。(p.48)	和音の音を使って旋律をつくらう。(p.28)	歌詞の抑揚を生かして旋律をつくらう。(p.28)
	民謡音階による音列から音を選んで旋律をつくる。 (共通事項) リズム、旋律 指導要項 ア	八尺調の和音から音を選んで旋律をつくる。 (リズムをかえたり、他の音を使ったりする) (共通事項) 旋律 指導要項 ア	言葉を8拍分のリズムにして、歌詞の抑揚を手がかりに八尺調の旋律をつくる。 (共通事項) リズム、旋律 指導要項 ア

※各学年で、指導事項ア、イの両方を学習します。

歌唱

ともに心を合わせて歌うことのできる教材をさらに充実させました。1年生の巻頭教材を一新し、『Forever』は巻末の「心通う合唱」に掲載しました。

O『We'll Find The Way』／巻末「心通う合唱」

1年 p.4・5

2年 p.60・61

ここがポイント★
歌唱教材に取り上げた楽曲の多くは、道徳教育にもつながる充実した内容をもっています。

器楽

O『クラッピング ラプソディ 第1番』

歌唱でも純粋な器楽でもない、手拍子による音楽です。小学校でも好評なこの教材は、どの生徒でも「音楽に参加し、合わせる」ことができるうに、音楽の基礎的能力も育むことができます。

▲器楽 p.76・77

Oアンサンブルのページ

さまざまな楽器及び編成による、バラエティー豊かな魅力あふれるアンサンブル教材を厳選して掲載しました。

▲器楽 p.58・59

鑑賞

O組曲「展覧会の絵」から——曲のよさをプレゼンテーションしよう。

いろいろなものの見方や考え方があることを理解するために、鑑賞を通した学び合いを実践します。授業時数を考慮し、曲趣の異なる3つの曲の中から気に入った曲を選んでプレゼンテーションすることが特徴です。

▲3年 p.30・31

◆ 改訂の3つの柱

3. グローバルな時代に対応していく力を育てます

歌唱 我が国の伝統的な歌唱の充実

「我が国の伝統的な歌唱」について、民謡、長唄、謡などを五線譜を使わずに「体験」する学習をします。また、鑑賞の学習ともリンクしています。



ここがポイント ★

模範演奏を聴いてまねることで、それぞれの曲にふさわしい発声を感じ取ることができます。模範演奏は男声と女声、それぞれを活用することができます。



歌唱 「歌い継ごう 日本の歌」の新設

巻末には「歌い継ごう 日本の歌」を新設し、中学生にふさわしい混声合唱に編曲。地域のお年寄りや他の国の人々との交流、行事などで発表することができる教材です。

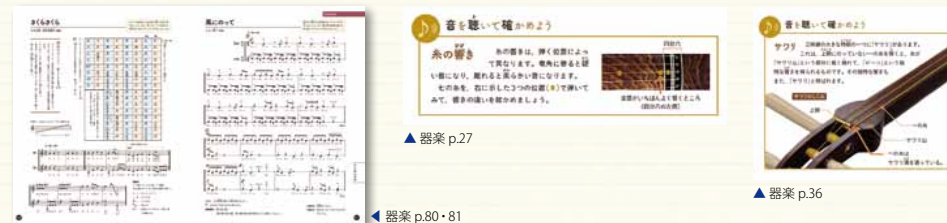


ここがポイント

長く歌い継がれてきた楽曲と新しい感覚を融合させることによって、世代を超えて「伝えていくこと」の可能性を広げました。

器樂

「アンサンブル」のコーナーでは、我が国の伝統音楽やその手法を用いた曲なども掲載しました。また、「音を聴いて確かめよう」というワンポイント学習では、奏法だけでなく「音色」に焦点を当てて楽器の特徴を理解することができます。



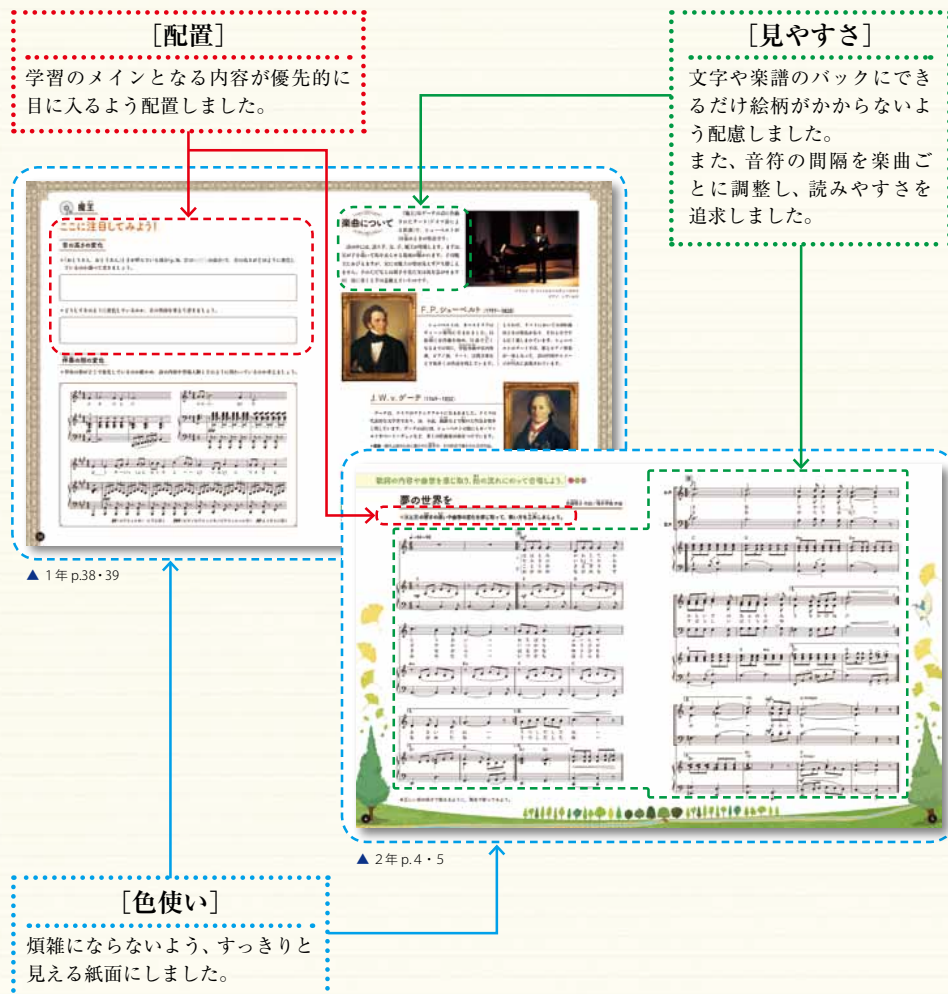
特集・資料

平和への希求とともに、我が国及び諸外国の伝統や音楽文化を学ぶことができるよう、特集や巻頭巻末の資料を充実させました。



❖ ユニバーサルデザインの理念に基づいた教科書づくり

学習内容や手順を理解しやすいように、文字情報や図版を見やすく分かりやすく提示し、音楽科の学習をより確実に進められるよう配慮しました。また、重要事項がパッと目に入ってくるシンプルなデザインで確かな学びへつなげます。



ポイント① ユニバーサルデザインの考え方を踏まえた教材開発

教育芸術社では、教材開発において、「すべての生徒が無理なく歌い、演奏し、活動して、学習内容に迫ることができるように」という考え方に基いて長年取り組んできました。文章や歌詞、楽譜の読みやすさといった紙面づくりに加え、教材開発における取り組みは、まさにユニバーサルデザインの理念を踏まえたものです。

ポイント② 道徳教育や人権教育における配慮

命の尊さ、他の人々に対する思いやりの心、友情の大切さを理解するなどの、道徳的心情の育成に資する歌詞をもつ歌唱教材を取り上げています。また、我が国の伝統的な音楽や長く歌い継がれてきた日本の歌の学習を通して、日本人としての自覚をもつことができるように内容を充実させました。

教科書を通じて願うこと

学校の教室には、子どもたちの創りだす生き生きとした空気があふれています。好奇心、向上心、探究心…さまざまな心の動きに満たされた空間の中で、1時間1時間が育まれていきます。

人と人とのコミュニケーションによって、「場」の空気はとても大切なものだと思います。あらゆる通信手段が発達した時代だからこそ、互いの考えや感性が直にふれあう授業の場は、かけがえのないものとなるのです。

音楽の授業では、歌声や楽器の音の響きが満ちあふれます。音も声も、空気が振動することによって耳まで伝わります。音楽とは、まさに私たちを取りまく空気そのものといえるでしょう。音の波によって心を揺り動かされ、感動が生まれ、感動を共にした仲間との間に強い絆が生まれます。やがてその絆は、自信となり、思いやる心となり、自分とは異なるものを受け入れ、理解する力へと深まって、生涯にわたりその人を支えてくれるはずです。

音楽科は、これからも学びの場を創造し、しっかりと支え続けていきます。小誌でご紹介した新しい教科書を通じて、子どもたち一人一人の感性がより豊かに育まれていくことを願ってやみません。

株式会社教育芸術社 代表取締役社長 市川かおり